

学習指導要領の変遷にみるサッカーの学習指導のあり方に関する一考察
A consideration about teaching soccer in physical education classes analyzed from
the historical transition of Japanese National Curriculum

1K08B115-0 世良 俊和

指導教員 主査 吉永 武史先生 副査 広瀬 統一先生

【序 章】

＜研究の動機＞

学校教育は、文部科学省が中心となって作成する学習指導要領に基づいて教育活動が行われる。その学習指導要領は、政治や経済などの社会状況の変化を踏まえながら約10年ごとに改訂される。体育科ならびに保健体育科においても、学習指導要領が改訂されるたびに「目標」や「内容」の見直しが行われてきた。そのような変化によって、体育授業の構成や学習指導のあり方についても変化がみられたことを知った。そこで、学習指導要領の改訂によって体育科ならびに保健体育科の「目標」や「内容」がどのように変化してきたのか、またそれらを具現化する学習指導のあり方がどのように変容してきたのかについて考えてみたいと思ったのが本研究の動機である。具体的には、児童生徒の中でも最も人気があるボール運動ならびに球技から「サッカー」を対象として取り上げ、サッカーの学習指導がどのように行われてきたのかを検討し、今後教職に就いたときに活かせるような知見を得たいと考えた。

＜研究の目的＞

本研究では、これまでの学習指導要領の変遷をたどりながら、体育科ならびに保健体育科の目標や内容を分析し、それに対応する形でサッカーの学習指導がどのように行われてきたのかについて検討することを目的とした。

＜研究の方法＞

本研究は、小学校ならびに中学校の学習指導要領や、ボール運動ならびに球技におけるサッカーの授業に関連する資料の講読による文献研究によって進めていく。

【第1章】技能・体力主義体育期におけるサッカーの学習指導

1958（昭和33）年の改訂から、学習指導要領は国家基準として法的拘束力を持つこととなる。この改訂では、戦後導入された問題解決学習や生活単元を中心とした経験主義体育が、子どもの経験や興味を重視しすぎるあまりに基礎的な技能や体力の低下を招いたなどの批判を受けて技能・体力主義への転換が図られた。他教科においても系

統的な学習が強調されていたことから、体育の授業でも技術を積み上げ式に教えていくような学習指導が推進された。そのため、サッカーの学習指導に関しても、パスやドリブルなどの個々の技術を身に付けてからゲームへ移行していくというのが主流であった。しかしながら、そのような授業では、教師が中心となって詰め込み主義的に学習が進められていくため、体育の授業や運動が嫌いになる児童生徒を増加させてしまうという問題がみられた。

【第2章】楽しい体育期におけるサッカーの学習指導

1977（昭和52）年の学習指導要領の改訂では、前時代で技能や体力が強調されたことによる「運動嫌い」の子どもたちを生み出してしまった反省と、生涯学習時代に伴う「生涯スポーツ」への転換から、「楽しい体育」が強調されるようになった。サッカーの学習指導においても、個々の技術を積み上げ式に学習していくような授業から、児童生徒の自主的学習をベースにした「ステージ型」の学習で授業が展開されるようになった。ゲーム中心に学習が進められる中で、教師は指導ではなく支援という形で児童生徒の課題解決を促していく役割を担うようになった。

【第3章】新しい学習指導要領に対応したサッカーの学習指導

2008（平成23）年3月に、新しい学習指導要領が公示された。この改訂では、現代の日本が抱える高齢化やストレス社会などの社会問題を重く受け止め、生涯にわたる健康の保持・増進を図ることがこれまで以上に重視され、体育科ならびに保健体育科では児童生徒の体力向上が強調されることとなった。また同時に、指導内容の明確化ならびに系統化が図られ、児童生徒が技術を習得し、身に付けたことを生かしながらゲームで生じる課題を解決するような学習指導が提案されている。特に、従来のボール操作に加えて、ボールを持たない動きを学習することの重要性が示され、サッカーの学習指導においてもパスを受けるためのサポートを身に付けるための教材などが工夫されるようになった。